

たとえば、全てに否定されようとも～外伝～

Laziness

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【たとえ、全てに否定されようとも】の外伝です。

杏さんの奮闘だったり・

天城さんの苦勞だったり・

本編では書かなかったことを、ここに書きます。

初見の方は、先に本編を読むことをお勧めします。

目次

そして、支部長になる

1

そして、支部長になる

「いきましよう、アン・アリミ。」

私は、男の子に手をつかまれ、新たな世界へと踏み出した・・・

私は有里美家を抜け出し、「WN×WR日本支部」というところに連れて行かれた。
「この大きさを・・・支部？」

「そうですね。この組織の規模は計り知れないので、早めに慣れるのが良いかと。」
WN×WRは、各国に支部を置いていると聞いたことがある。

「ほらほら！遠慮しないで中に入って！」

「え？え!？」

私は促されるがままに、その形容できないほどの大きさの支部に入った。

中に入ってみると、なんとも清潔。

「わあ・・・」

「アン・アリミ、こちらです。応接室に案内します。」

「じゃあ、僕は必要な書類を持っていく。知りたいことは彼に質問してくれたらいいよ。」

元帥さんはどこかへ行つてしまい、男の子と2人で取り残された。

「では、いきましようか。質問は歩きながらどうぞ。」

「う、うん。じゃあさ・・・」

質問を許可されたので、質問させて貰おう。

「私って・・・何の職につくの・・・？」

彼は悩むような仕草も見せず、こう言い切った。

「支部長ですね。」

「いや・・・そう言われても・・・。」

支部長がどれ程の重役なのか、私には想像がつかない。

まあ・・・言っちゃ悪いけど・・・支部長って階級低そう・・・かなあ？

「説明足らずでしたね。まず、WN×WRの構成から説明させていただきます。この組織は、まず大きく「内務」と「外務」に分けられます。内務は一旦置いて・・・アン・アリミが属する、「外務」について説明します。外務は、その名の通り実際に戦場に赴いたりなど、本部から離れて活動する任務を受け持ちます。実動体（通称W・W）潜入捜査

団（通常S・W）など沢山の部隊がありますが、支部長はそのどれにも属しません。支部長は『特別執行部』という役職となります。一般的に呼ばれることは滅多に無いですが。」

「『特別執行部』・・・？凄いの・・・？」

危惧していたことが訪れたかもしれない。

救って貰ったのは嬉しいけど・・・もし重要な役職だったら・・・？

「そうですね。全ての部の、頂点に位置しているといつてよいでしょう。」

な・・・!?

ちよ、頂点!!

いままで、最早その辺りの泥レベルで扱われてきた私が・・・!!

「な!?!そ・・・そんな!!」

「特別執行部には他にも、捜査主任や現場指揮主任、はたまた戦場医師主任など、さまざまな主任や重役が集まっています。いわば、リーダーの集まりです。」

想像以上だった。凄いのかな〜程度だったのが、最早今すぐ辞退したい気分だ。

まあ、与えられた以上はしつかりやってみたいけど。

「それしか・・・ないの・・・？」

「元帥の気が変わらなければ。ですが誇ってよいのですよ、貴方にはそれほどの才能があつたということです。」

私に・・・才能・・・？

今まで、ろくに戦うこともさせてもらえなかつたこの私に・・・？

「待つて・・・私に才能なんて・・・！」

「貴方が自覚していなくとも、元帥が貴方の才能、そして強さを感じ取つたのです。今まで戦わせてもらえなかつたのなら、これから階級に驕らず鍛えれば良い。貴方のその強さ、私もこの身で感じましたから。」

世界最強・・・とか言つてたっけか。

こんな子供の言葉が、今の私には凄く心に響いたようで。

「うん・・・じゃあ、がんばつて・・・みる。」

「ええ、少しずつ。人間、日々精進していくものです。」

何だろう、この子はもう悟りでも開いているんだらうか？

「君の・・・役職は・・・？」

「【外務総統】ですね。先程、【外務】と【内務】に分かれていますと説明しましたよね。それの【外務】の方の、リーダー的立場にいるものです。」

・・・は？

いやいや、まさか。

疑うのも悪いんだろうけど、あのWN×WRの半分以上を担ってるってことだよ・・・ね

？

私がいままで男の子・・・とか言ってたこの御方・・・まさかの超重役。

「あ、特に遜ったりしなくても良いですよ？今までどおりで。」

「いえ・・・そういうわけにも・・・。」

そう言われても、階級を伝えられてしまっただけは、どうにもこうにも・・・といった感じだ。

「困惑の表情ですか・・・ではもう、お好きにどうぞ。」

(あ、諦めた。)

「わかり・・・ました。外務総統・・・？」

その呼び方に、彼は若干顔をしかめた。

「できれば、階級で呼ぶのは止めて頂ければ……。」

「で……でも……。」

彼は、諦めきつた顔をし……

「まあ、現日本支部長を見れば分かるか……。では、少し寄り道しましょう。」

本来行くべきルートを変えて、彼が向かったのは「支部長室」

どうにも、入るのに勇気がある扉である。

「失礼します。ジョシユア様、いらつしやいますか?」

『お、その声は。入っていいぞ!』

ノックの後、随分陽気な声が響いてきた。

「失礼します。」

「し……しつれい、します」

私は、たじろぎながら部屋に入ってしまった。

「おや、ディザ殿。この子はなんだい……つと、すまんすまん野暮なことを聞いたな。」

「いったい……何を勘違いしているんですか?」

彼女は、口元を手で覆いながら、申し訳なきような顔をした。

野暮……なんぞだろ。

「勘違い?なんだ、日本に来ていきなり彼女の一人でも作ったのかと」

「貴女とは違いますからね。」

「はっは！その通r・・・じゃねえ!!生まれてこの方、はっ！」

男の子が、真面目な顔をしてそういうことを言うものだから、私は頬を染めつつ、ついつい笑いをこぼしてしまった。

「この通りです、アン・アリミ。支部長クラスは堅苦しそうに見えて、こんなのばかりなのです。」

「こんなの・・・つちやあ心外だがねえ。」

彼女は酔っ払った父上のような顔をしている・・・。

仕事中に飲酒とはいかがなものか。

「ですから・・・心配しないでください、アン・アリミ」

「うん・・・わかった・・・ふふ。」

「お、おう・・・なにやら解決したようで。」

どうやら彼女曰く、支部長が結局一番仕事が楽らしい。

「じゃあ・・・」

天城様♪

とか・・・どうかな。」

彼は僅かに頬を赤らめ・・・た気がする。

「え、ええ。ではそれで。」

「いいねいいねえ、青春だねえ。」

にやけながらこちらを見つめる支部長、最早唯の変態さんだ。

「では・・・そう呼ばせてもらいます、天城様・・・。」

「め、メイドみたいだな・・・」

「ご不満・・・ですか・・・？」

「ぐはっ！」

なぜか、鼻血を吹いて倒れてしまった。

ジョシユア様が。

「何故貴女が倒れるのです？」

「いや・・その、破壊力うですかねえ？」

何で疑問系なんだろ。

「天城様・・ありがとう、ごございます・・。お陰で安心しました・・。」

「いいえ、では戻りますか。もういきますね、ジョシユア様。」

彼女が、亡霊のように起き上がってきた。

「おう・・またいつでも来いよ。」

彼女はそのまま倒れていつてしまった。

「あの人って・・やっぱり強いんですね・・？」

いつの間にか、完全に敬語になってしまった。

「ええ、あんな成りですがね。」

「私も・・強くならなきゃ。」

彼は、それに対し首を横に振った。

「決して焦る必要はありません。貴女はあなたのペースが一番良いのです。ですから・・

これから私と強くなっていきましょう。心身ともに・・ね。」

「・・・はい!!」

その後、手続きを済ませ、無事私は【支部長】になったのであった。

それからの苦労は、また別の話・・・。